

春日部

# 俳句の歴史散歩



小学校で俳句の授業が行われている春日部には、古くから続く俳句の歴史があった。

## 芭蕉が『奥の細道』紀行で最初に泊まった粕壁宿

元禄2(1689)年、『奥の細道』紀行で、松尾芭蕉は粕壁宿に宿泊したとされている。東陽寺の山門脇には「伝芭蕉宿泊の寺」と彫られた標柱が見られる。なお、芭蕉が泊まった場所は小洲山観音院など諸説ある。



東陽寺には『會良(そら)旅日記』の一文が刻まれた碑がある。

## 春日部は現代俳句の代表的俳人加藤楸邨が俳句を始めた地

日本の現代俳句を代表する俳人の一人、加藤楸邨は、昭和4(1929)年、粕壁中学校(現春日部高等学校)の国語教師として赴任し、8年間、春日部で過ごした。その間に同僚にすすめられて俳句を詠み始めた。

同じ頃、粕壁医院(現在の安孫子医院)に診療の手伝いに来ていた俳人水原秋桜子に師事する。二人は古利根川の河畔を散策しながら、俳句や人生について語り合ったという。春日部時代の作品は句集『寒雷』に多く収められている。

昭和12(1937)年、楸邨は意を決して上京、本格的に俳句の道を歩み始めた。

## 加藤楸邨

1905～1993年

「俳句の中に人間の生きることを第一に重んずる」ことを求め、「人間探求派」と呼ばれた。弟子たちには作る主体である人間のあり方が一番大切であることを教え、楸邨の創刊した句集『寒雷』からは金子兜太(かねごとうた)ら多くの俳人が生まれた。松尾芭蕉の研究でも知られる。



春日部高校敷地内に建立されている加藤楸邨の句碑。「木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ」と刻まれている。敷地内には、楸邨自筆による「落葉松はいつめざめても雪降りをり」の句碑もある。

# 埼玉県俳句連盟文化祭俳句大会

平成26年11月23日に開催された俳句大会。多くの参加者が春日部のまちと俳句を楽しんだ。

## 加藤楸邨旧居跡や日光道中を巡って俳句を詠む休日



加藤楸邨旧居跡にて。

春日部は「奥の細道」の松尾芭蕉や加藤楸邨といった俳人にゆかりのある土地。特に古利根川の近くには、楸邨の旧居跡や日光道中の道しるべなどがあり、吟行句会の場所としても人気だ。

今回の俳句大会は、まちの自然や史跡などを見て回り、最後に投句をするというイベント。

埼玉県内のさまざまな場所から集まった参加者は、真剣なまなざしでガイドの話に

耳を傾け、その場で句を詠む人もいた。



## 句材の多いまち、春日部に参加者たちは大満足

大宮から参加した砂村康子さんは俳句歴10年以上の経歴を持つ。「楸邨先生が春日部で句を詠んでいたこともあり、いつかは来たいと思っていたのが、ようやく実現しました。特に、見たいと思っていた古利根川はユリカモメもたくさんいてすばしかったです。また違う季節に来てみたいです」。同じく大宮から来た福田利子さんは「春日部は古利根川をはじ



春日部観光ボランティアの会によるガイドもあった。

め句材がとても多いですね。モダンだけ都會過ぎず、広々とした場所も残っていて清楚な印象。ぜひ、また句を詠みに来たいです」

岩槻から参加の伊藤和子さんは、「春日部は日光道中の宿場町の面影がところどころに残っていて、句を詠むのにいい場所。楸邨旧居跡では、猫を大切に飼っていたという楸邨先生の話が思い出されました。吟行は気心の知れた仲間と一緒に来るので余計楽しいです」と語ってくれた。

参加者はそれぞれの思いを句にしたためて投句。その後は、アクシス春日部で開催された講演「加藤楸邨の人間像(講師＝森田公司氏、かたばみ主宰)」に耳を傾げるなど、俳句一色の休日を楽しんでた。

